

特集「デスクトップパブリッシング」の編集にあたって

中 川 正 樹†

本特集は、デスクトップパブリッシング (DTP) に関し各界の代表から横断的解説をいただき、ニーズを掘り起こすこと、技術の現状と動向を正確に伝えること、を2本の柱にしたサーベイ特集である。

DTP について、印刷業界、出版業界、OA 業界など、おのおのの解釈に大きな隔たりがあり、その理解を互いに深めることによって、よりよい研究開発が期待できると考える。また、技術の現状を正確に把握することも不可欠である。学ぶべきものは学び、独自で考えるべきものは考えるという読者諸兄に本特集がさやかな材料を提供できればと考えている。

まず、総論では、DTP の歴史、現状、そして技術動向の紹介を行う。2章では、各界でこの問題に深い関わりのある方々から、各界を代表してそれぞれのDTP に対する見解を述べてもらうことにより、DTP の全体像を探る。DTP のように、いくつかの業界や業種にまたがった問題では、自分とは異なる視点、見解を知ることが必要である。3章では、DTP の重要な要素技術として、文書エディタ、文書整形ソフトウェア、ページ記述言語、フォント関連技術に関し、それぞれ、現状と問題点、将来動向を解説する。そして最後に、人間との関わりについて論じる。

DTP の実用化と普及により、誤植の混入を防ぎ、出版物の急増に対する写植技術者の不足という社会的問題を緩和し、学会の予稿や社内出版などで高品質で迅速な出版および改訂を可能にする、などの効果が期待されている。

しかし一方で、印字品質で写植に迫るか、あるいは、それ以上を追い求めること以外に、人間の文書作成を支援し、また、文書情報の利用を高めるために考えるべきことがまだ多く残されている。

DTP を単独の技術として捉えるのではなく、それを利用する活動との連携において考えることも重要である。なぜなら、その活動の文書化が DTP によって活動と一体となり、統合化された環境が作られるからである。ソフトウェア工学と DTP はまさに好例である。

DTP と同様、最近よく使われることばに、電子出版 (Electronic Publishing) がある。電子出版は、CD ROM やネットワークなどのニューメディアによる出版、あるいは情報提供まで含むものとして、本特集では DTP と区別した。電子出版の動向にも注意を払う必要があるが、社会的要因とのからみから特集に盛り込むには時期尚早と判断した。

DTP の発展と普及のためには、文書記述の標準化はきわめて重要である。本特集でも、標準化と DTP の関連は何カ所かで扱われている。しかし、編集委員会で文書記述言語の標準化に関する別の企画が進行しているので、内容の詳細はそちらに譲りたい。

この特集の企画は、「商業誌的な感じもする」ということで、難航した。また関心をもつ読者はワープロメーカーで開発に従事している人ぐらいではないかという意見もあった。

しかし、ワープロ業界と一言で言っても、総合電気、通信機、精密機械、計測、事務機器などの分野のメーカーがなだれ込み、「生鮮食料品市場」と呼ばれるほど新製品開発競争が激しい業界を構成している。この分野に携わる情報処理技術者、研究者の数もおびただしい。

反対意見の中には、「特集というのは、定式化された問題の提起、それに対するアプローチ方式の列挙、それらの比較評価としてのまとめと今後の課題、という形式であるべきだ」との特集のあり方に関するものもあった。

しかしながら、計算機科学、特に、ソフトウェアシステムでは、定式化された問題を解くというのではなく、センスのある個人が一見突飛な夢を描き、それを実現してみせて、新しい局面が開けてきた例も多い。研究者、技術者が、定式化以前あるいはそれが不可能な状況においても、社会のニーズを把握しておくことは、彼らの夢が大きく花開くために大切である。

執筆者としては、学会誌だからこそ書いていただける方々をお迎えすることができた。本特集が上記のような反対意見を否定しえていないとすれば、ひとえに編集担当の責任である。 (平成2年10月23日)

† 東京農工大学工学部電子情報工学科